

濕原

A Mystery Novel 長編推理小説

殺人

Murder in the Oze Marshland

尾瀬



梓林太郎

Azusa Rintaro

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫



光文社文庫

長編推理小説

尾瀬殺人湿原

著者 ^{あずさ}梓 ^{りん}林 ^{たろう}太郎

1991年5月20日 初版1刷発行

発行者	大坪昌夫
印刷	慶昌堂印刷
製本	榎本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(3942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Rintarō Azusa 1991

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71330-0 Printed in Japan

日本音楽著作権協会許諾番号 第9161004-101号

二文社文庫

江苏工业学院图书馆

長編推理小説

藏書章

梓 林太郎

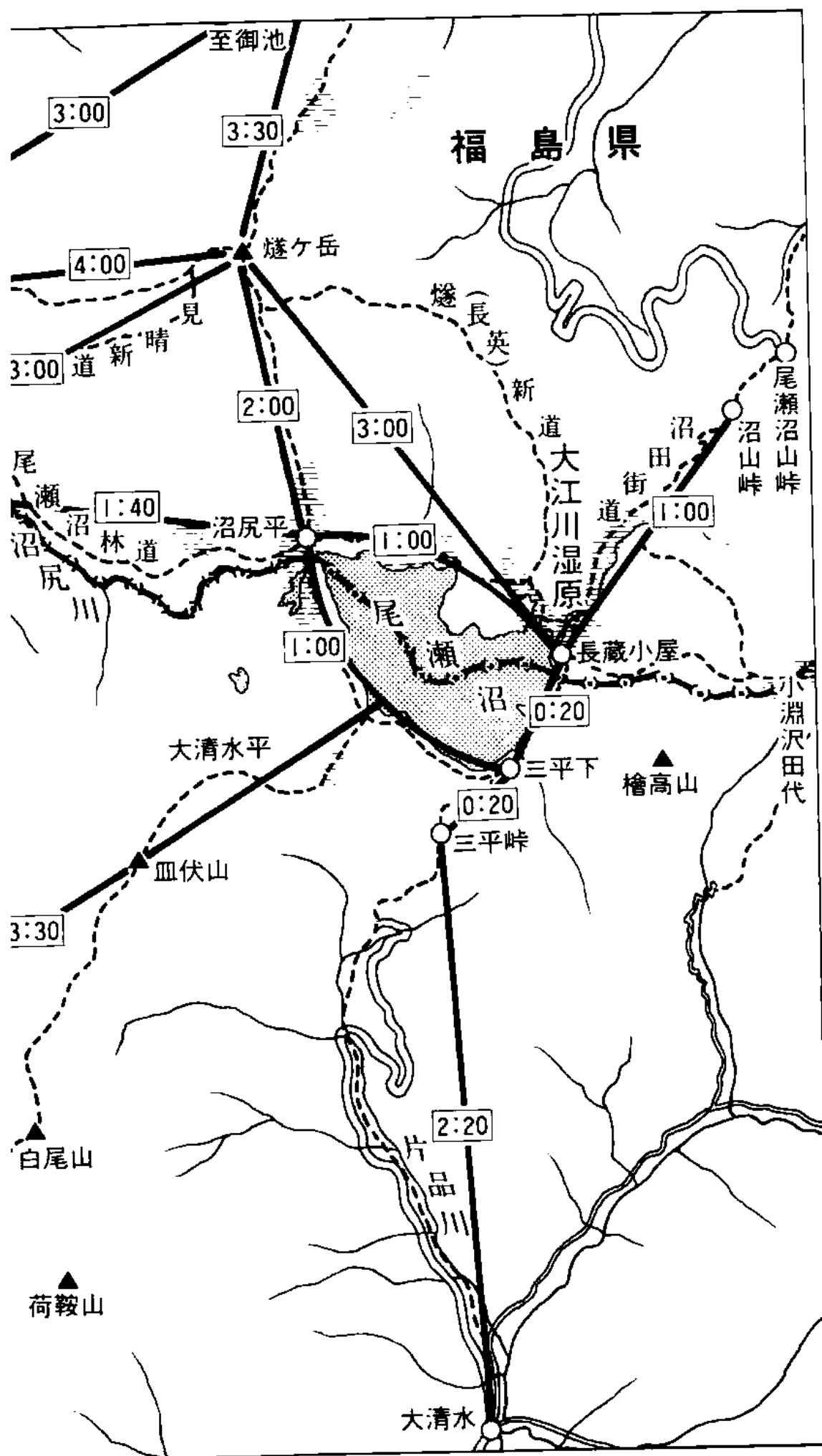


光 文 社

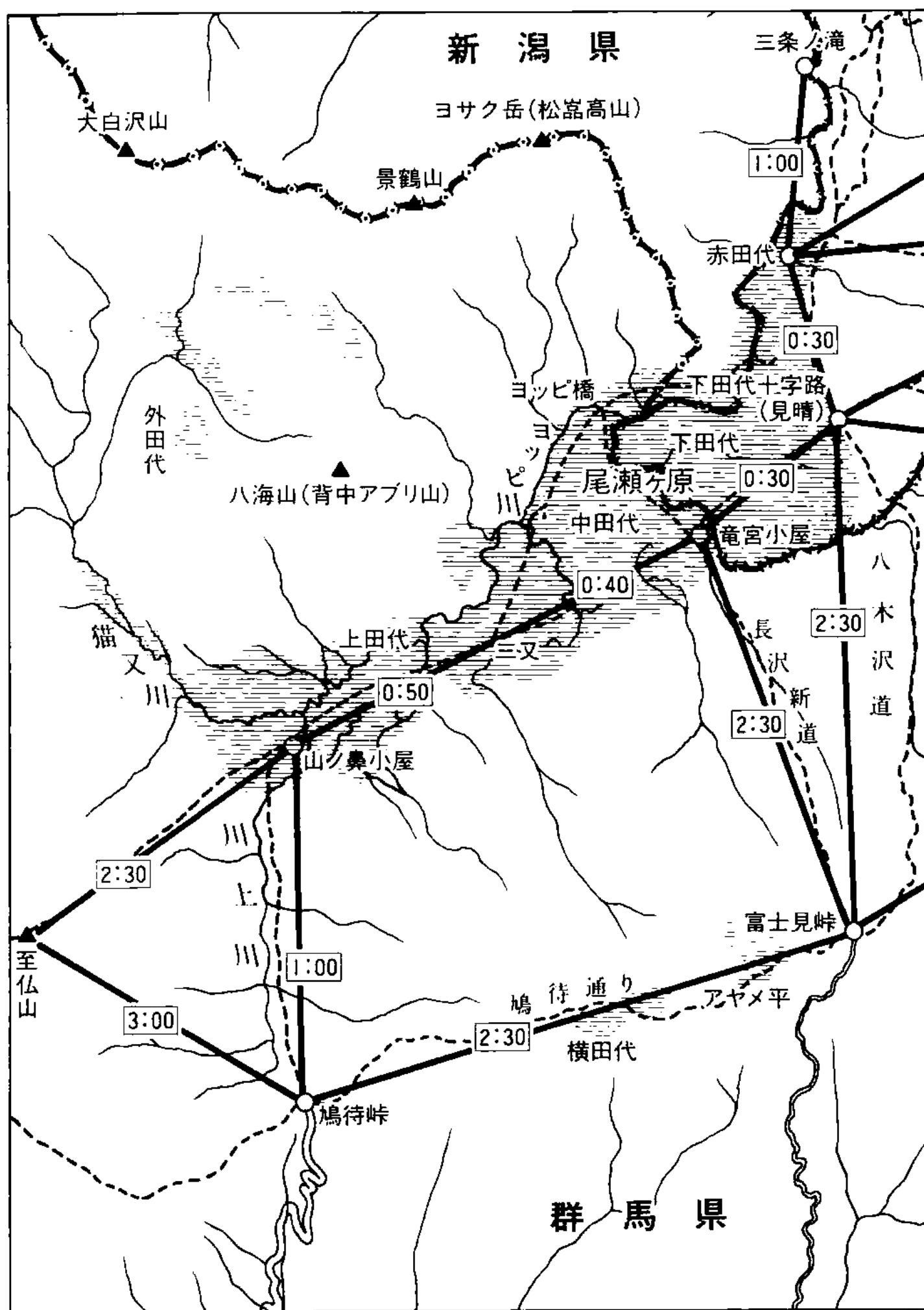
目次

一章	夏の思い出……………	7
二章	沼畔の遺体……………	46
三章	尾瀬ヶ原冬景色……………	79
四章	三平 ^{さんぺい} 峠の怪我人……………	102
五章	刻まれた文字……………	134
六章	似顔絵の男……………	164
七章	フォトネーム……………	199
八章	脱却の起因……………	223
九章	最後の謎……………	263
解説	縄田 ^{なわた} 一男 ^{かずお} ……………	291

尾瀬案内図



●注 () はおもな所要時間



一章 夏の思い出

1

雪の降る二月、東京の北東部で若い女性が殺害され、川に放り込まれるという事件があった。犯人の目星が付かないまま四カ月経過したが、強い雨が二日つづいたあと、空地のぬかるみを歩いた男の靴跡が決め手になって、犯人が割り出された。

警視庁捜査一課から事件地の捜査本部へ応援に出向していた荒竹十三刑事は、事件解決と同時に自席に帰ってきた。こういうときは、廊下で会う上司や同僚が口々に、「やあ、ご苦労さん」といつてくれる。

彼が提^さげてきた紙袋の中身は、出向していた捜査本部で使っていた着替えや靴である。ロッカーへ置く物と自宅へ持ち帰る物を選^より分けていると、

「荒さん、電話だよ」

三つ離れた席の同僚刑事が呼んだ。

受話器は、硬いテーブルに投げ出されたようになっていた。

「忙しいとこじやなかったんですか？」

そういったのは、飯岡邦朗いひおかくにろうだった。

「いや。きょうはこれから帰ろうと思っていたところだ」

「明け番なんですね？」

夕方だから明け番には遅過ぎるが、

「まあ、そんなところだ」

それならぜひ相談にのってほしいことがあると飯岡はいった。声の調子は沈んでいた。切羽詰まったことが起こって、考えあぐねた末に、電話をよこしたというふうにも受け取れた。

六月に入ったばかりだが、真夏の夜のように蒸し暑かった。強い雨は二日間降ったが、東京はまだ水不足だという。今にも雨が落ちてきそうな空模様だったが、きょうもとうとう降らずじまいだった。電車の乗客の中には傘を持っている人が混じっていた。けさの天気予報は雨だったのだ。

新宿歌舞伎町かぶきちょうにある小料理屋「梅家」に着くと、飯岡はビールを前に置いて待っていた。

「両足はちゃんとあるんでしょうね」

女将の挨拶である。それでも彼女はタバコを消すと、カウンターの途中で腰を折った。

飯岡も椅子を立った。

「お忙しいところを、呼び出してすみません」

飯岡の挨拶は気味が悪いほど丁寧だった。彼は、建築設計事務所に勤めている。二十七歳だ。三歳上の彼の兄が警察官で荒竹と同年だった。新宿署にいるとき、銃を持って銀行に立てこもった強盗犯人に単独で立ち向かったが、一発の銃弾で射殺された。正義感の強い男だったが、この性格が仇^{あだ}になった。この兄の関係で、荒竹は飯岡邦朗を知り、親しくしている。

飯岡は、奥の小座敷を予約していたらしく、女将が障子を開けた。赤いテーブルに盃が伏せてあった。

「不景気な顔しているな」

荒竹は、飯岡の銚子を受けた。

「分かりますか？」

「電話をもらったときから、なにか困り事が起きたんだなと思っていた」

「じつは……」

飯岡は盃を舐^なめると、眼をしばたいた。

「誰かが死んだのか？」

荒竹は、手酌^{てじやく}で三杯ほど飲んで盃を置いた。ゆっくり飲めるのは四カ月振りだった。

「欲しい物があつたらいいってね」

女将が、閉めた障子越しに叫ぶような声を掛けた。

「付き合っていた人が、行方不明になったんです」

「付き合っていたって、女か？」

「結婚しようと思っていました」

年齢からいったら当然だろう。

「真面目な相手だったのか？」

飯岡は、当たり前だというふうに顎を引いた。

「詳しく話してみろ」

飯岡は、盃を半分ほど干すと、箸袋をいじりながら話し始めた。

——飯岡邦朗は、半年ほど前に取引先の建設会社に勤めているまきみやこ榎未弥子と親しくなった。彼女は二十二歳だ。

品川区のアパートに住んでいたが、入居者が男性ばかりになったのを嫌って、新宿の中野区境に近い小さなマンションに移転した。

引っ越しを飯岡が手伝った。六月一日だった。

「ここなら、飯岡さんにきていただけるわ」

未弥子はそう言って、頬に手を当てた。

彼女の家財はわずかだった。五、六個の段ボール箱は軽かった。それまで一間きりのアパート暮らしだったからでもあるが、飯岡は彼女のつましさをあらためて知った思いがした。

未弥子は着衣にも凝^こるところがなかった。たまに銀色のネックレスで襟元^{えりもと}を飾っていることがあるが、耳や腕にアクセサリーを付けているのを飯岡は見た覚えがなかった。腕時計の型も古かった。色白の丸い顔は彼女の素朴さをそのまま表わしていた。

荷物を据^すえ終えると、キッチンが広く見えた。小型ならテーブルを置けるスペースができたが、彼女はそれを買うとはいわなかった。飯岡は、彼女のためにそっとテーブルをプレゼントしようと考えた。二人で向かい合って食事を摂^とる風景を想像した。

「引越したから、近くの店からソバを取ろうか」

飯岡がいった。

「おソバなら、わたしが茹^ゆでるわ。日本ソバがあるの」

「じゃ、お祝いにビール買ってくる」

「缶ビールね」

飯岡は、長いサイズの缶ビールを二本、自動販売機で買って帰った。未弥子は、鍋に湯を沸かしていた。

未弥子は、キッチンの板敷に前のアパートで使っていた卓袱台^{ちやぶだい}を置き肉厚のグラスを二つ並べた。いずれも古い物だった。

開け放った窓から夕方の風が入り込んだ。

窓に顔を振った未弥子がなにかいった。飯岡は彼女の肩に手を掛けた。

「幸せ過ぎて、なんだか罰でも当たりそうな気がするわ」

彼女は、煮立った湯にソバを入れた。

そのとき、鐘が鳴り出した。オルゴールの曲を近くのスピーカーで流しているような音だった。

「あら……」

未弥子は、ガスコンロの火を止めると窓辺に寄った。

「『夏の思い出』だわ」

曲をきいて彼女はいった。六時だった。時報代わりに「夏の思い出」の曲を鐘で鳴らしているらしかった。

その曲はすぐに終わったが、未弥子は窓枠に手を添えたなり遠くを見る眼をしていた。この三階の窓の下には、カシ、マツ、ウメなどの植木で囲んだ庭があり、その中に家主の母屋の黒い瓦屋根があった。未弥子は動かなかった。飯岡が後ろにいるのを忘れているようだった。

彼は彼女に並んだ。ものをいわなくなった未弥子の横顔に眼をやると、なんと彼女の頬には涙が糸を引いていた。飯岡は声を掛けられなくなった。

「ごめんなさい」

未弥子は指で頬を拭くと、ふたたびガスコンロに点火した。

「あの曲、毎日やるのかしら」

「そうだろ。時報だよ、きつと。嫌いなのかい、あの曲？」

未弥子は首を横に振った。

彼女はザルソバを作ったが、それまでとは違って口数が減った。ビールを飲む眼がうるんでいるように見えた。飯岡は、「夏の思い出」をきいた彼女が、幼いころを思い出し、その懐かしさからふと涙をこぼしたのかと想像した。彼の大学の先輩に、童謡の「赤とんぼ」をきくと涙をにじませる男がいる。その曲をきくと、わけもなく泣けるのだといっている。未弥子の「夏の思い出」もその男と同じなのかもしれないと飯岡は解釈した。

三日後だった。飯岡が勤める事務所へ未弥子から電話があった。

「あした尾瀬へ行ってきたいの」

「尾瀬……。誰かと一緒に？」

「一人よ」

「急に、またどうしたんだい？」

飯岡の耳に、未弥子の新しい住まいで一昨日の夕方きいた鐘の曲がよみがえった。それは尾瀬を歌った曲だった。彼女はきのうも六時にそれをきいたのかもしれない。

「尾瀬を見たくなったの」

「尾瀬のなにを？」

「今はミズバショウが咲いているわ。見たいのはそれだけじゃないけど……」

飯岡は、写真でしか尾瀬を知らなかった。

「君一人で大丈夫なのかい。来週の土曜ならばくも一緒に行けるんだけど」

「前に何回も行ったことがあるの。道はよく覚えてるわ」

「泊まらなきゃならないんだろう？」

「二泊してくるわ。だから火曜には帰ってきます」

未弥子は、現地から電話するといった。

飯岡は、未弥子が急に尾瀬へ行くといい出したことが気になり、その夜、彼女のマンションを訪ねた。彼女は、赤いリュックに着替えを詰めていた。なぜ急に尾瀬へ行くのかを尋ねると、今が一番きれいな時季であることを思い出したのだと答えた。飯岡は、一昨日の夕方、彼女が「夏の思い出」の鐘をきいて、涙を流していたことには触れなかった。たぶん尾瀬に深い思い出があるのだろうと想像し、その思い出に嫉妬したものだ、気をつけて行ってくるようにとしかいえなかった――。

2

「彼女から電話はあったのか？」

荒竹は、自分で盃を充たした。

「六日の消印の絵はがきが届きました」

飯岡は、タバコにライターをすった。

「未弥子さんは六月五日に出発したんだから次の日に投函したわけだな」

飯岡は、茶革のショルダーバッグから未弥子の絵はがきを取り出した。水の光の中にミズバショウが白い花を開いている写真のはがきだった。

「一泊目は長蔵ちようぞう小屋です。小屋は満員で、談話室でこれを書くのに苦劳しました。でも、小屋の近くから眺めた夕方の尾瀬はとてもきれいでした。あしたは尾瀬ヶ原でこの写真の風景が見られます」

形のいい細かい字が並んでいた。几帳面な性格が文字に表われているようだった。

「彼女は長蔵小屋に泊まって、次の朝これを投函して出発したんだろうな」

——絵はがきが飯岡の手に落ちたのは七日の午後だった。未弥子は彼の勤め先へ宛てていた。絵はがきを見た飯岡は、数時間後に掛かってくるはずの未弥子の電話を待ったが、残業している事務所で彼は彼女の声をきくことができなかった。

彼女のマンションにはまだ電話が引けていないから、彼は直接彼女を訪ねることにした。

夜、十時を過ぎても未弥子は帰宅しなかった。自宅に帰った飯岡にも電話はなかった。翌日も同じである。未弥子の部屋のドアには新聞がたまっていた。